



モダンメディアの編集委員を終えるにあたって、ひと(り)言

熊本大学大学院 生命科学研究所 客員教授／東京医科大学 微生物学分野 兼任教授／
元 国立がん研究センター中央病院感染症部長

いわ た さとし
岩 田 敏
Satoshi IWATA

この3月で、10年間務めた「モダンメディア」の編集委員を卒業することになりました。新型コロナウイルス感染症流行中は、Web開催が続いた時期もありましたが、台東区台東の栄研化学株式会社本社に、8月を除く毎月1回水曜日の夜に通わせていただいたことが懐かしく思い出されます。時には8月の第一水曜日に会議があるつもりで汗をかきかき辿り着いてみたら、部屋は真っ暗、すごすごと帰宅したこともありました。この間、勤務先が変わったことで、編集会議への経路も何種類か試すことができました。最初、北里大学の中山哲夫先生から編集委員を引き継いだ時は、信濃町の慶應義塾大学医学部に居りましたので、JR総武線の黄色い電車に乗り、秋葉原乗り換えで御徒町下車、慶應を退職して築地の国立がん研究センター中央病院に移ってからは、都営大江戸線築地市場から新御徒町まで一本で通わせていただきました。昨年3月に同院を退職してからは、赤坂にある自宅から東京メトロ千代田線、日比谷線を利用して仲御徒町下車、もしくは都営大江戸線の六本木-新御徒町間を利用、といった具合で、普段クルマ通勤でしたので、たまの電車通勤をひそかに楽しんでいただいていた次第です。

さて、この10年間編集委員としてお世話になり、勉強させていただきました。誌面の作成にどの程度お役に立てたかどうかについては、心もとない部分もございますが、小児科医、感染症医の立場から、取り上げるべきテーマの提案や著者の推薦などさせていただきました。自身が関わった企画の中で特に記憶に残っているのは、コロナ禍となる直前の2019年2月に、岡山県環境保健センターを探訪子として訪問させていただいた「新版・全国衛生研究所見聞記 其ノ拾八 岡山県環境保健センター之巻」(モダンメディア2019年(65巻)12号掲載)です。

岡山県には、日本で唯一まとまった鉍量の見込めるウラン鉍である人形峠鉍山が存在するため、同センターには放射能科という部門が設置されていて、環境放射線等の監視測定を行い、収集されたデータをリアルタイムで公表するなど、特色のある取り組みをされていたらっしゃいますが、実は当時所長を務められていた岸本寿男先生は感染症研究を通じた旧来の友人であり、しかも尺八の国際的な演奏家ということで、センターの見学終了後は同行したモダンメディア編集事務局の神野文夫氏、大森圭子氏、美濃部さやか氏共々岡山市内に繰り出し、見聞記番外編としてライブハウスでのセッションを大いに楽しませていただいた次第です(写真)。

また、座談会もいくつか企画させていただき、多くの専門家の先生方のお話を伺う機会がございました。その中で自分でも特に興味深く感じたのは、通巻800号記念特集で企画させていただいた「地球温暖化-地球規模で考える環境と健康-」(モダンメディア2020年(68巻)7号掲載)です。環境問題やグローバルヘルスの専門家の先生方のお話を伺い、地球温暖化の問題は本当にもう待たなしの状況になっていて、すぐにでも強力な対策を講じないと手遅れになってしまう、ということがとても良く分かりました。地球温暖化に対しては、個人でもできる対策を意識して実践していこうと思っています。

最後の企画は、今年2024年の第70巻1号に掲載された「新春放談 ネクストパンデミックを見据えて…」になります。基礎医学、臨床医学、社会医学、公衆衛生それぞれの専門家の先生方から、新型コロナウイルス感染症パンデミックの経験と反省を踏まえ、「備えあれば憂いなし」、「有事への準備は平時から」という考えの下、次のパンデミックを念頭に置いた対応について大いに語っていただきました。

日本の感染症研究の将来を見据えた貴重なご意見を、本音トークで伺うことができ、まさに新春放談に相応しい内容になったのではないかと考えております。是非ご一読いただければと存じ上げます。

モダンメディアは一企業が発行している雑誌ではありますが、検査医学や感染症学、公衆衛生に関連したアカデミックな内容と、その時代の様々なトピックスを分かりやすく解説した内容がミックスし

た、素晴らしい学術情報誌だと思います。しかも1955年8月の創刊以来、毎月1回の発行を続け、今年は70巻という節目を迎えることになります。どうかこれからも、息の長い雑誌としてずっと続いていくことを願いつつ、次の編集委員の皆さまにバトンを渡したいと思います。10年間本当に有り難うございました。



写真 岸本寿男先生(左端)たちとのセッション風景
(左から二人目が著者)